木村龍之介演出、松岡和子訳『King Lear ― キング・リア』劇評

撫原華子

――要旨

本稿は 2022 年 3 月にまつもと市民芸術館にて上演された『King Lear ―キング・リア』公演の劇評である。この公演では、ウィリアム・シェイクスピア作『リア王』に、戦争、介護、財産相続といった現代にも通じるテーマが少なからず描かれていることが明確に示されていた。この劇評では、この公演が示唆した『リア王』の現代性を、プロローグとして付け加えられていた冒頭シーンや、ゴネリル、リーガン、コーディリアといった女性登場人物たちの表象の観点から論じるとともに、それ以外のこの公演における特筆すべき演出についても指摘する。

老王が意に反して、悲痛な余生を強いられることになる、ウィリアム・シェイクスピア作『リア王』は、時として観る者の胸を締め付ける悲劇である。それにもかかわらず、この劇が初演から四百年以上を経た今日でも上演され続けるのはなぜなのだろうか。2022 年 3 月にまつもと市民芸術館にて上演された『King Lear ―キング・リア』公演は、この劇に戦争、介護、財産相続といった現代にも通じるテーマが少なからず入っていることを改めて明確に示すことで、その問いへの答えを提示していた。ここでは、この公演が示唆した『リア王』の現代性を、プロローグの位置づけで付け加えられていた冒頭シーンや、ゴネリル、リーガン、コーディリアといった女性登場人物たちの表象の観点から論じたのち、それ以外のこの公演における特筆すべき演出についても指摘しておきたい。

本公演の『リア王』の現代性は、シェイクスピアの原作にはなく、プロローグの位置づけで付け加えられている、冒頭のシーンにおいて、意表を突く形で鮮烈に示された。このシーンは、「世界滅び、あなたは揺れて～」という短調の旋律に乗せられたソプラノ歌手の歌声で幕を開けた。アルミシート素材でできた紗幕越しに観客の目に飛び込んでくるのは、舞台奥でリア王（串田和美）が王座に腰掛けて佇んでおり、その前方で名もない老若男女が機関銃の音と爆撃音が鳴りひびく暗闇のなかを逃げ惑い、うずくまったり倒れたりする様子がスローモーションで繰り広げられるさまであった。やがて真っ赤なライトが舞台全体に当てられ、まるでそこが血に染まったかのような趣を醸し出していた。さらにいえば、

舞台上や幕にアルミシート素材が配されている効果で、その血のような赤色が反射して小劇場全体を覆い尽くすかのようであった。

Asahi.com に掲載されていた劇評でも指摘されているように、このプロローグは「まさに今、世界で起こっていること」を観客に想起させずにはおかない力を持っていた（松島まり乃「串田和美が運命に立ち向かうリアに挑む。『King Lear ―キング・リア』まつもと市民芸術館にて開幕」https://www.asahi.com/and/pressrelease/415766613）。そして、開演前の BGM として、ジョン・レノンの『イマジン』が、終演後には『スタンド・バイ・ミー』が流されていたことにも、現実社会で起きていることと劇中の出来事とを地続きに捉えようとする姿勢が垣間見えたことを言い添えておきたい。このように、木村龍之介の冴えた演出は、ウクライナの人々が身をもって経験したように、悲劇というものはあらゆる人間に降りかかる可能性があることを劇の入り口で明示し、本編で展開されるリア王の悲劇と現代社会に生きる我々との接点を堅固に築いて見せたのである。なお、コロナ禍ということで、この公演は休憩なしという制約（当日の上演時間は 2 時間 20 分）があったことも影響して、『リア王』の後半で描かれている戦争の描写やそこでの犠牲についての言及は大幅にカットされていた。その代わりをこのプロローグが担っていたともいえるのではないか。

次に、『リア王』という芝居の現代性が浮き彫りにされたのは、ゴネリルとリーガンの表象においてである。それが最初に示されるのは、なんといっても、１幕１場の演出であろう。本公演の演出では、ふたりは少なくともこの時点では悪女ではなく、ただその場の雰囲気に合った振る舞いをしたに過ぎない。陰鬱でセンセーショナルなプロローグの直後に続いたこのシーンの滑り出しは、そこまでの雰囲気とは打って変わって、陽気で楽しげだ。出席者らは談笑し、舞台の前方にはマイクが置かれ、マイクテストの後、まるで「豊かな領土獲得ゲーム」という名の余興のような体裁で、1960 年代風の装いに身を包んだリアの娘たちが、舞台奥の中央の王座に位置する父親を喜ばせるべく、彼と出席者たち、そして観客たちに向かって、マイク越しに言葉を発していく。その余興の口火を切ったゴネリル（毛利悟巳）は気を回し、父親の望むとおりの発言をして彼を喜ばせ、会場を沸かせ、リーガン（下地尚子）もそれに続く。彼女たちが領土を与えられると、ケントがその領土の地図が入った額縁を頭上に掲げて祝福していた。そこにあるのは、現代にも通じるような、ごく普通の家族の団らんの光景であった。

この家族の歯車が狂い始めるのは、リアがコーディリアを勘当したあたりからである。それまでとは打って変わって、ゴネリルとリーガンに、年老いた父への不信感と彼の老後の世話をすることへの嫌悪感が芽生える様を、今回の公演では、コミカルかつ印象的に描いていた。一同が退場した直後、ゴネリルが「どうお、お父様は歳のせいですっかり気まぐれにおなりだわ。これまで見てきただけでも相当なもの。いつだって妹が一番のお気に入りだったのに、後先考えずに放り出したのが何よりの証拠だわ。」というと、リーガンが「耄碌したのよ。もっとも、昔からご自分のことは少しもお分かりじゃなかったけど。」（松岡訳 p.29）と応じるが、この会話をマイクが拾ってしまい、彼女たちの声が大きな音で

会場内に響く。そのことにやや遅れて気付いた彼女たちは、あたりを見回し、誰もいないのを確認するという演出となっていた。それは、現代でも多くの人々が直面する介護問題に足を踏み入れた、ふたりの娘たちの戸惑いが会場の観客たちにも共有された瞬間であった。彼女たちの変貌ぶりをゴネリル役の毛利と、リーガン役の下地が説得力を持って演じていた。なお、このように１幕１場では、マイクという現代の機器の使用が印象的だったが、今回の演出では他にも携帯電話やLINEメッセージなども盛り込まれており、効果的に機能していたことも付け加えておきたい。

この公演で『リア王』の現代性が示された点の最後として、コーディリア表象を挙げておきたい。先に触れた１幕１場の余興的な雰囲気のなか、コーディリア（加賀凪）は自分の気持ちに嘘がつけず、少し融通の利かない、一本気な人物として表象されていた。彼女は「私の愛は／口で言うよりずっと重いんだもの。」(松岡訳 p.14）とつぶやきつつも、その場の雰囲気に自分を合わせることが苦手なために、「何も。」とそっけない返答をするばかりで、父親が催した余興に水を差してしまう。「80の坂をこえた」（松岡訳 p.210）父親には、末娘のその短い返事の背後にどんなに深い愛情が隠れているのか想像する余裕がなく、父娘の想いはすれ違ってしまう。今回の演出ではこのシーンにおいて、コーディリアの魅力は見出しづらかった。これは従来の『リア王』の上演においてはあまり見られなかったことではないだろうか。

勘当されたコーディリアが次に舞台上に姿を現すのは、4幕4場においてである。このシーンにて、彼女はアルミシート製の数メートルはありそうな長いローブと戦闘服を纏って登場した。ブリテン軍が攻めてくるという知らせが入り、戦争が勃発するというときの科白、

> ただ愛、深い愛のため、そして、年老いたお父様の大権のため。
> 一刻も早くお目にかかってお声を聞きたい！（松岡訳 p.181）

を叫ぶと、彼女はその長い裾をものともせずに、勇壮に走り出し、奥行きのある舞台を三周もして退場した。それを裏打ちするように、その前の場面での紳士がコーディリアを讃えていう、以下の科白はカットされていた。

> 忍耐と悲嘆とが相争い、
> どちらがお妃様を一層美しく見せるかを競う風情。陽の光と雨が
> 同時に降り注ぐことがありますが、お妃様の微笑みと涙は
> ちょうどそれ、いや、更に言えば、ふっくらと赤い唇に
> 幸せそうな微笑みが遊びたわむれ、お目にどんな客が訪れたかも
> 知らぬげでした。その客が去る様は
> ダイアモンドから真珠がしたたり落ちるよう。まったく、

悲しみほどいとしいものはないと言えましょう。
誰にでもあれほど似合うなら。（松岡訳 p.176）

この科白にあったような、従来の可憐でどこか神聖なコーディリア像はそこにはなく、あるのはジャンヌ・ダルクばりの活力あふれる女性像であった。長い裾をはためかせながら勇壮に走るコーディリアの姿は彼女の快活さを観客たちの目に印象づけた。こうした快活な女性像は現代的であるといえよう。以上が、筆者が本公演に現代性を感じた箇所である。

なお、こうした迫力あるコーディリア像の一方で、リア像は従来よりもやや弱体化しているようにもみえた。

リアが生来の兵士の気質の持ち主であることを示す科白、

昔の俺なら、鋭い剣を揮って
やつらを蹴散らしてやったろうが、もう歳だな、
おまけにうち続く苦労で腕も鈍った。（松岡訳 p.243）

は削除され、リアがコーディリアの亡骸と登場するとき、娘はリアの腕に抱かれているのではなく、リアが引きずってきた布にくるまれて横たわっていた。喜び、怒り、忍耐、狂気といった内面の揺れ（ときに激震）を十分すぎるほどに経験してきたリアは、最愛の娘を亡くすに際して、ついに精魂尽き果てたのである。

また、リアの内面の荒れ模様を象徴する 3 幕 2 場の激しい嵐は、アルミシートを動かすことで出るガサガサという音と雷の効果音、そして天井の蛍光灯がパチパチと消えることで巧みに表現されており秀逸だった。そうした演出も、リアの内面を描き出すことに大きく貢献していた。

本公演に惜しむべき点があるとすれば、本公演では、「なにもない（“nothing”）」ことの価値をリアが理解するまでの過程の描き方が、科白のカットにより、やや希薄であったことであろうか。コロナ禍の影響で、生身の人間同士の交流の大切さが再認識され、SDGs の観点からは、シンプルであることが再評価される現代だからこそ、そこに光を当ててほしかった気はする。

とはいえ、会場は割れんばかりの拍手に包まれ、多くの観客がスタンディング・オベーションで俳優たちを讃えた。来年 80 歳になる串田は、同年代のリア王を人間味溢れる、愛すべき王として造形し、観客はそのリアの生を全うした姿に晴れ晴れと心震わせたのである。

（2022 年 3 月 15 日、まつもと市民芸術館小ホールにて観劇）

―― 引用文献

ウィリアム・シェイクスピア、松岡和子訳『リア王』（シェイクスピア全集 5）、ちくま文庫、1997 年